

競技経験者を対象とした PAC 分析による 男子新体操イメージの検討

野田 光太郎

1. 目的

本稿の目的は男子新体操のイメージについて考察することである。新体操は、スポーツか芸術か（渡部 2009）、目的的スポーツか美的スポーツか（浦谷 2014）など、その分類や特性が議論の対象となる数少ないスポーツ競技のひとつであった。先行研究によって、新体操の競技特性は明らかにされつつあるものの、実際にそれを行う競技者個人の次元において、新体操とはどのようなものなのか、ということは研究の対象になりにくかった。加えて、新体操をめぐる議論の対象となるのは女子新体操に限定されることが極めて多く、男子新体操は研究対象となることがほとんどなかった（野田・秦 2015）。少なくとも日本では、新体操には女子新体操と男子新体操がある。女子新体操だけでなく男子新体操に目を向けた議論も必要だろう。

以上の問題意識から、本稿では、これまであまり議論されてこなかった男子新体操に焦点を置く。また、競技に多様な仕方に関与するだろう個人の次元で、男子新体操がどのようなものとして認識されているのかを分析する。具体的には、PAC（Personal Attitude Construct、個人別態度構造）分析（内藤 2002）の手法を用いて、個人の持つ男子新体操の競技イメージを明らかにする。

2. 方法

方法論に関する検討

PAC 分析は、社会心理学者である内藤哲雄によって開発された「当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるク

クラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する」(内藤 2002: 1) 研究法である。具体的な手順は後述するが、「操作的・実験的・(記述)統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述の手法の両者が包含されている」(内藤 2002: 4) ことが強みといえる。とくに教育学や心理学などの領域で多く使われる研究法である。ここで数例ではあるがPAC分析を用いた先行研究を概観しておく。教育学的研究としては、例えば太田・佐渡島(2012)がライティング・センターにおけるチューターの個別指導実践に関する意識を、PAC分析を用いて詳察している。同様に今野・池島(2010)は、小学校職員の持つ学校イメージとその変化を分析している。教育学の領域では、教育実践やそれが行われる場に対する個人の意識構造を示すという目的の下で、PAC分析が使用されていることがわかる。心理学的研究としては、内藤(2000)がPAC分析によって外国人留学生の孤独感の典型的構造を提示した。また青木(2007)は臨床心理学の立場から、心理療法を通じて個人が抱える心理的問題に対する認識がどのように変化するかをPAC分析によって検討した。さらにPAC分析はこうした研究以外にも、多文化理解(平山 2006)などの目的の下でも使用されている。以上の先行研究の例に示されるとおり、個人的な経験や心理状態だけでなく、経験が行われる場や関係性を理解するといった目的に至るまで、幅広い問題意識に適した手法としてPAC分析が活用されていることがわかる。

スポーツ関連領域では、体育授業における学びの構造に注目した井上(2010)などの例はあるものの、スポーツ競技そのものを対象とした研究でPAC分析が用いられることは、管見によればほとんどない。しかし、上記に示したように、PAC分析は個人のイメージの構造を把握する方法として多様な主題に適用可能であると理解すれば、スポーツ科学領域においてこの方法を適用することは妥当であると考えられる。

したがって本稿は、男子新体操のイメージ構造を個人の次元からとらえることを目指した試みであるとともに、PAC分析をスポーツ科学領域の研究に適用することを試みるものでもある。

調査対象

A 大学新体操部に所属する男子学生 1 名（24 歳）を対象に、PAC 分析を実施した。被験者は男子新体操歴 12 年であり、過去に筆者による指導を約 2 年半受けていた。現在では現役を引退しているが、インターハイ、国体での上位入賞、全日本インカレでの個人総合優勝経験を持っている。また、数年間カナダ・アメリカにてエンターテインメント集団である B 社のパフォーマーとして男子新体操を基にしたショーに出演していた。被験者には研究の趣旨および学術目的以外にデータを用いないことを説明し、調査協力に関する同意を得た。

調査手続き

2015 年 10 月、表 1 に示した内藤（2002）の手順に準拠し、被験者に PAC 分析を実施した。実施した時間は約 2 時間 30 分であった。

表 1 PAC 分析の実施手順

①	当該テーマに関する自由連想
②	連想項目間の類似度評定
③	類似度距離行列によるクラスター分析
④	被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告
⑤	実験者による総合的解釈

男子新体操のイメージを報告してもらうために、次の教示を用いた。

「あなたは男子新体操にどのようなイメージを持っていますか。今までの試合やショーでの経験なども含めたこれまでのこと、今現在のことなど、どんなイメージでもいいので頭に思い浮かんだ単語や短文を、思い浮かんだ順に記入して下さい。」

連想項目間の類似度距離行列のクラスター分析には統計解析ソフト IBM SPSS Statistics（Version23）を用い、デンドログラム（クラスター分析の結果を示す樹形図）を作成した。クラスター分析の下位技法には Ward 法を用いた。Ward 法は、「かなりの数の PAC 分析の研究で有効性が確認されている」（内藤 2002：46）と示

されているように、PAC 分析においては標準的に用いられている。

PAC 分析においては被験者によるクラスターのイメージとその解釈が特に重要となるので、インタビューは被験者の内面で生じるイメージや感覚を自由に回答できるよう、オープンクエスチョンを原則として実施した。また、「クラスターを解釈する際の一般的な方法は、研究者が有効な解釈が得られると判断した距離で、デンドログラムを横断的に直線で切断する」（内藤 2002:46）とされているが、「被験者 1 名の構造データでは（中略）実験者が推測困難な当人の独自のニュアンスや経験を含蓄する変数から構成されているので、逆に積極的に被験者からイメージや解釈の報告という支援を求めるべきである」（内藤 2002:46）と述べられているので、本研究ではクラスター構造の解釈の際に被験者から積極的に支援を求めた。クラスターの命名に関しては、実験者が総合的解釈の時に行うのが一般的とされるが（内藤 2002）、被験者が命名している先行研究（今野・池島 2007）もある。本研究では研究の再現性を高めるため、被験者のイメージに沿って各クラスターをひとことで言い表せばどう言えそうかを尋ねた。その上で実験者が被験者の言表を参考にしつつ命名を行った。

3. 結果と分析

表 2 被験者の連想項目

重要順位	連想項目	イメージ
1	動きとアクロバットの融合	(+)
2	人間性が演技に出る	(+)
3	一番好きなこと	(+)
4	人に伝える努力	(+)
5	チームワークの大切さ	(+)
6	譲りあう心	(+)
7	先生や両親などへの恩返し	(+)
8	空気を読む	(+)
9	工夫	(+)
10	時間の使い方	(+)
11	気持ちが伝われば点数が変わる	(0)
12	モチベーションの維持	(+)
13	人との比較	(+)

14	一人一人の世界観	(+)
15	同時性	(+)
16	表現力	(+)
17	ダンスにはない体の使い方	(+)
18	手具を使ったタンブリング	(+)
19	ルールが曖昧	(0)
20	一つのミスが命取り	(-)
21	なめらかな隊形移動	(+)
22	ダイナミックな動き	(+)
23	人が人を越える交差技	(+)
24	アクロバット	(+)
25	サーカスでも通用する組技	(+)
26	陸上のシンクロ	(0)
27	綺麗なレオタード	(+)
28	手先が女性的	(-)
29	国体がなくなった	(-)
30	地元チームがなくなった	(-)

被験者の連想項目を重要順位順に並べ、表2に示した。連想項目数は30で、各連想項目のイメージはプラス(+)23項目、マイナス(-)4項目、どちらでもない(0)3項目であった。図1は被験者のデンドログラムである。図の左側に示した数字は項目の重要順位、横軸は項目間の距離を示す。被験者のクラスターに関して、切断距離を4.00付近として7分割することを試案として持ちインタビューを実施したが、被験者は6.00付近で4分割した(図1)。

被験者によるクラスター1の解釈

クラスター1を構成する項目は「ダイナミックな動き」、「アクロバット」、「人が人を越える交差技」、「サーカスでも通用する組技」、「なめらかな隊形移動」、「空気を読む」、「同時性」、「気持ちが伝われば点数が変わる」、「ルールが曖昧」、「一つのミスが命取り」、「陸上のシンクロ」、「一人一人の世界観」、「手具を使ったタンブリング」、「表現力」、「ダンスにはない体の使い方」、「動きとアクロバットの融合」の16項目であり、被験者はこのクラスターを「男子新体操を構成する要素」

図1 被験者のデンドログラム

(イメージ：+) と言い表した。そのように表現した理由を被験者に尋ねたところ、以下のような解釈が語られた。

(クラスター1は) 男子新体操の競技性というか、周りから見てわかることと僕が競技としてやっててわかる良さと、っていうところですね。技術的なものと、それが世界(B社)で認められていた部分も入ってますし…今メディアとかに注目されだしたのは何でかっていう、男子新体操のいいところと悪いところもちろはらと出てるんで(このように言い表しました)。

切断距離を決定する過程で、クラスター1を更に細分化した場合にはどのような解釈ができるか被験者に意見を求めた。その結果、「ダイナミックな動き」、「ア

クロバット」、「人が人を越える交差技」、「サーカスでも通用する組技」、「なめらかな隊形移動」の5項目のまとまりについて「B社に入団できたのは、アクロバットというジャンルでの採用であったからだと思います。隊形移動に関してもダンスや他の競技にない大きな移動が評価されていたと感じていました。複数人でのアクロバットは他のスポーツなどにあまりないので、そういう部分も評価されていたと思います。同時性も求められてはいたと思いますが、思ったよりも重要視はされていなかったような気がします。世界（B社）で必要とされたこと、と解釈することができるかな」と語った。

「空気を読む」、「同時性」、「気持ちが伝われば点数が変わる」、「ルールが曖昧」、「一つのミスが命取り」、「陸上のシンクロ」までの6項目のまとまりは「男子新体操が世界に通用する部分もあり、通用しない部分もあると思います。具体的には、ルールが曖昧な点や気持ちが伝われば点数が変わるなど、そういう部分で得をしている選手もいると思いますし・・・そういう部分を上手く利用できる選手は成績を残せていると思います。男子新体操の複雑な部分を示していると思いますよ」と語った。

「一人一人の世界観」、「手具を使ったタンブリング」、「表現力」、「ダンスにはない体の使い方」、「動きとアクロバットの融合」の5項目のまとまりは「ちょっと男子新体操をかじった・・・ちょっとした経験者でも気づける部分というか・・・男子新体操をしたことがない一般の人によく言われる褒め言葉と解釈することができるかな。逆に言えば、男子新体操をしている人がいい意味で誇張している部分でもあると思います。一般の人たちにも審判の人たちにもわかりやすくしているっていうか・・・」と語った。

「一人一人の世界観」、「手具を使ったタンブリング」の2項目のまとまりは「僕が大学時代に一番工夫していたことで、僕がかっこいいと思った選手が大事にしていたことだと思います。まあ個人競技において重要なものみたいな感じですね」と語った。

「表現力」、「ダンスにはない体の使い方」、「動きとアクロバットの融合」の3項目のまとまりは「今の新体操の説明みたいっていうか・・・ちょっと悪い言い方か

かもしれませんが、誇張したことしか見ていない、時代の流れというか、男子新体操の基本的な部分があってそれが活かされるのに、そこばかりに重点を置いているような流れがあるように感じます」と語った。

被験者によるクラスター 2 の解釈

クラスター 2 を構成する項目は「先生や両親などへの恩返し」、「モチベーションの維持」、「人に伝える努力」、「チームワークの大切さ」、「人間性が演技に出る」、「譲りあう心」、「一番好きなこと」、「工夫」、「人との比較」、「時間の使い方」の 9 項目であり「男子新体操に対する姿勢」（イメージ：+）と言い表わされた。被験者の語りによるクラスター 2 の解釈を以下に示す。

これは部活動として大学でやった時に習ったことと、自分で気づいたことと・・・これは新体操以外の仕事とかでも役立つものだと思います。技術的に習ったことだけじゃなくて、気持ち的に習ったこと、新体操だけじゃなくて他のものにも活かせる。良さ・・・人として（身に付いたこと）って感じですね。

クラスター 1 と同様に、切断距離を決定する過程でクラスター 2 を更に細分化した場合にはどのような解釈ができるか被験者に意見を求めた。その結果、「先生や両親などへの恩返し」、「モチベーションの維持」の 2 項目のまとまりは「僕は練習が好きでやっていましたが、つらい時ももちろんあって、その時に先生や両親の事を考えると、おのずと頑張れたんです。もちろん自分が成績を残すために頑張ってたけど、気持ち的につらくなってきたら誰かのために頑張るって気持ちを切り替えてました。その繰り返しでやっていたので引退した今考えると練習に対してマイナスなイメージはないです」と語った。

「人に伝える努力」、「チームワークの大切さ」、「人間性が演技に出る」、「譲りあう心」、「一番好きなこと」、「工夫」、「人との比較」、「時間の使い方」の 8 項目のまとまりは「H 大学でやっていた時に、日本一を経験した先輩たちが周りに沢山いて、

その人たちの練習姿勢や日頃の生活などを見て、僕が気づいたこと・・・それが一人一人（での練習）にしろ、チーム（での練習）にしろ、大学の授業にしろ、何に対しても一日の過ごし方や取り組み方で成績も変わってくるんだなって思いました」と語った。

「人に伝える努力」、「チームワークの大切さ」、「人間性が演技に出る」、「譲りあう心」、「一番好きなこと」の5項目のまとまりは「僕はB社に行くことが夢だったのですが、その夢を叶えるためには、一人じゃ何もできないのでチームワークの大切さとか人間性とかを大事にして、練習に取り組めばおのずと道が開ける（と思っていました。結果的に、それは）部活を引退して社会に出ても活かせることだと、就職して思いました。このことは、大学時代にキャプテンを任されて他人を見る（＝指導する）ことも多くなったからこそ気づけたことでもあり、僕が部員のみんなに伝えなかったことです」と語った。

「工夫」、「人との比較」、「時間の使い方」の3項目については「24時間はみんなに平等なので、その限られた時間の中でどれだけ男子新体操について考えられるのが大事だと思って練習していました。例えば他の人が遊んでいるときに体育館にいて少しでも練習したり、他の人の演技を見てその人の良さを観察し自分の演技に生かせないかなって考えたり、家で曲を探したりとか・・・何も考えないでただ練習するだけじゃなくて頭を使った練習が大事だってこと」と語った。

被験者によるクラスター3の解釈

クラスター3を構成する項目は「国体がなくなった」、「地元のチームがなくなった」の2項目で、「必要としていた場所」（イメージ：－）と言い表された。被験者の語りによるクラスター3の解釈を以下に示す。

事実であると同時に僕の中ではもう過去の話で、昔は多分これ（＝国体や地元のチーム）があったからやってたっていうのはあったと思うんですけど、これはもう今の僕には必要ないみたいな・・・若干残念な出来事（程度のこと）というか・・・

被験者によるクラスター4の解釈

クラスター4を構成する要素は「綺麗なレオタード」、「手先が女性的」の2項目で、「芸術性」（イメージ:0）と言いつわされた。被験者の語りによるクラスター4の解釈を以下に示す。

中性的なものが芸術とされるっていうところですね。（男子新体操が）美しさとか、女性的な部分があるとか、あんまりいいイメージで（周囲から）見られていない部分っていうか、女性のスポーツでしょって思われてたり・・・僕が自分ではわかってない、周りから見た芸術性・・・確かに自分で見ても女性的って思う部分もありますけど、それが芸術って言われちゃったら芸術なのかなって。だから若干中性的って言われても仕方ないのかなって思います。芸術性を求められる競技なので、それがいい部分でもあるんですけど。色々言われても仕方ないのかなって。

なお、ここで「中性的なものが芸術とされる」と語られているのは、被験者自身の考えなのではなく被験者がB社のレッスンを受けていた際に言われたことであると後日確認した。

被験者による全体についての解釈

被験者の語りによる全体についての解釈を以下に示す。

僕の頭の中では男子新体操っていうのはこれで出来てたっていうことですよ。僕の中ではやっぱり（クラスター2の）男子新体操に対する姿勢、メンタル的なことが大事だよなって思います。他の人、（男子新体操を）やったことがない人にもある程度は（大切だと）言えることだと思います。だけど実際にやってみないとわからないというか、気づかないというか・・・これ（＝クラスター2）以外は、やらなくてもある程度わかることだけど、（クラスター2は）やってみないとわからないし、気づかないかなと。ある意味では（男子

新体操の)面白さでもあると思います。普通は「面白さ」というと、新しい技ができるようになったり、そういうことを指すと思うんですけど、(クラスター2は)やらないとわからない面白さですね。

4. 考察

ここでは、筆者による総合的解釈を述べる。

クラスター1

被験者はクラスター1を「周りから見てわかること」であり、かつ「僕が競技としてやってわかる良さ」であると述べていた。そしてそれを「男子新体操の競技性」だと言い表していた。つまり被験者は、他者の目(客観的視点)と自分の目(主観的視点)の両方が接合するものとして「競技性」をとらえているのである。各連想項目からもやはり「陸上のシンクロ」、「ダンスにはない体の使い方」など他者から男子新体操がどのように認識されていると感じているのかという、客観的に見る視点と「サーカスでも通用する組技」、「気持ちが伝われば点数が変わる」など被験者自身の経験によって培われた主観的、直観的に見る視点との両方を持っていることがわかる。

このクラスターを構成する項目の重要順位に注目すると、重要順位が最も高い「動きとアクロバットの融合」以外の項目はどの項目も重要順位は高くないという特徴がある。これを言い換えると「動きとアクロバットの融合」という1つの項目で男子新体操を競技としては俯瞰的に捉えることができると認識しているということになる。しかしこれも、後述するように「他者の目」が多分に意識されたものであり、複雑な思いが凝縮されていることに留意したい。

クラスター1は3つの小さなまとまりから構成されていた。1つ目は「ダイナミックな動き」、「アクロバット」、「人が人を越える交差技」、「サーカスでも通用する組技」、「なめらかな隊形移動」の5項目である。被験者はこのまとまりを、男子新体操が他者から評価される際に重要であることと認識していた。とはいえ、先述したように実際には他のまとまりにも「他者の目」は意識されている。ここは

とくに、男子新体操のスペクタクル（見世物）的な側面、見る者を惹きつけ、喝采を浴びやすい側面と理解することがいえよう。

2つ目のまとまりについて被験者は「世界に通用する部分もあり、通用しない部分もある」、「男子新体操の複雑な部分」であると解釈している。つまりここでは「一つのミスが命取り」といった項目が連なっている。つまり競技会などでの評価、採点に関する項目が並んでいるといえる。

このまとまりの項目のイメージに注目すると、2項目が「+」（「空気を読む」、「同時性」）、3項目が「0」（「気持ちが伝われば点数が変わる」、「ルールが曖昧」、「陸上のシンクロ」）、1項目が「-」（「一つのミスが命取り」）となっている。他の項目のほとんどが「+」になっているのに対し、このまとまりのみイメージの方向にばらつきがあった。とくに、一般的なスポーツ競技ではほとんど見られない「気持ちが伝われば点数が変わる」、「ルールが曖昧」という2項目のイメージが「0」（どちらでもない）になっていることに、ここで注目したい。こうした項目のイメージは「-」と評定されてもおかしくはないが、被験者のイメージは「+」でも「-」でもなかった。

男子新体操は複数の審判員によって採点される競技である。採点は技の難しさや出来栄えのみを対象とするのではなく、演技の感性的な側面も評価の対象となる。採点の恣意性は、審判員の高度な専門性と良識によって回避されることとなる。半面、審判員の曖昧な感性によって点数が左右される可能性を残しているということもできないわけではない。そのような性質を鑑みて、被験者のイメージが形成されたと推測される。「+」と「-」の項目数の比率は、葛藤度ないしは両価感情度の指標となる（内藤 2002）ことから、これらの項目に関する被験者の両価感情が見て取れる。

3つ目のまとまりについては、被験者は「ちょっとした経験者でも気づける部分」、「一般の人によく言われる褒め言葉」であり、また「男子新体操をしている人がいい意味で誇張している部分」でもあると解釈していた。これらの言葉からは、このまとまりに含まれる項目を男子新体操の表層的な部分でしかないと被験者が認識しているように見えるかもしれない。しかし実際にはそうではなく、男子新体

操を人に見せる（見られる）競技として、1つ目、2つ目のまとまり同様に多面的にとらえているのである。それはこのまとまりに対する以下の言葉からわかる。

まず「一人一人の世界観」、「手具を使ったタンブリング」の2項目について、被験者は「僕が大学時代に一番工夫していたこと」、「個人競技において重要なもの」と語っていた。男子新体操には手具を用いる個人競技と手具を用いず集団で行う団体競技があり、これはとくに個人競技としての男子新体操に目を向けた、中立的な語りである。

一方「表現力」、「ダンスにはない体の使い方」、「動きとアクロバットの融合」の3項目については、被験者は「今の新体操の説明みたい」、「誇張したことしか見ていない、時代の流れ」、「男子新体操の基本的な部分があってそれが活かされるのに」と語っていた。これらの3項目のイメージを被験者は「+」としているにもかかわらず、ある意味では批判的ともとれる言葉が語られていることに、ここで注目したい。これは、「今の新体操」が「男子新体操の基本的な部分」（これは「ダンスにはない体の使い方」に類すると考えられる）を必ずしも重視しなくなった、という意味であるように思われる。男子新体操の基本的な部分とは、動きの深さや幅とも表現されることがある部分で、例えば、踵を最大限引き上げたり、全身を可能な限り大きく使ったりといったことだろう。被験者は、そうした部分を基盤とせず小手先の表現に終始する演技が増えてしまったことを、多少なりとも残念に感じているのかもしれない。したがって被験者の語りは、時代による競技の変化と他者の競技に対する認識の変化について、競技の発展に伴い失われていくものと生み出されるものを大局的に静観し、現在の男子新体操の特徴と自己の経験を重ねて語ったものととらえることができるのである。

以上からクラスター1を、＜男子新体操の代表的な特徴・魅力・難点＞と命名する。

クラスター2

クラスター2は人間性あるいは取り組みに対する姿勢に関する内容でまとまっている。ここに挙げられた項目は、「チームワークの大切さ」、「譲りあう心」な

ど男子新体操をとおして得られた内的な感覚が表出したものであり、被験者にとって男子新体操がスポーツ競技としての定型的な説明だけではとらえられないものであることを示している。また、すべての項目において重要順位が比較的高く、イメージが「+」であることから、男子新体操を人間的な成長をもたらす学びの場として肯定的にとらえていることがわかる。

クラスター構造を見ると、このクラスターは2つの小さなまとまりから構成されている。1つ目に関して被験者が「つらい時ももちろんあって、その時に先生や両親の事を考えると、おのずと頑張れた」、「つらくなってきたら誰かのために頑張るって気持ちを切り替えてました」と語っていることから、競技者にとってモチベーションを維持するために他者の存在が重要であると被験者が認識していることがわかる。2つ目については、被験者は「日本一を経験した先輩たちが周りに沢山いて、その人たちの練習姿勢や日頃の生活などを見て、僕が気づいたこと」であると語っていた。ここから、直接的に受ける指導ではなく練習をとおして間接的に自ら学んだ事柄について、同じ場所で時間を共有した他者の存在の重要性和、自らの気づきの重要性を認識しているのである。この2つ目のまとまりは、さらに小さな2つのまとまりとしてとらえることもできた。1つ目の5項目について被験者は「一人じゃ何もできない」、「チームワークの大切さ」、「僕が部員みんなに伝えたかったこと」などの言葉で表現していた。すなわち、自らの学びの成果を他人と共有することが、自らにとっても有益なことであると認識しているのである。2つ目の3項目については、「限られた時間の中でどれだけ男子新体操について考えられるのか」、「頭を使った練習」が大事と被験者は語っている。技術的な練習のみでは不十分で、深く考え工夫することこそ大切であることを、自らの経験によって学んだのである。

以上から、クラスター2を<心理的な成長・学びの場・他者との関係>と命名した。

クラスター3

クラスター3は男子新体操を取り巻く環境と事実に関する内容でまとまってい

る。このクラスターは「地元チームがなくなった」、「国体がなくなった」という2つの項目によって構成されているが、「昔は多分これがあったからやってた」、「今の僕には必要ない」という語りから、男子新体操という競技にとって大切なものを失ってしまったが、過去のことではどうすることもできなかったという気持ちが表れている。2つの項目の重要順位に注目すると、30位、29位とどちらの項目も低く評定されている。イメージもどちらも（マイナス：-）となっており、マイナー競技である男子新体操という競技のプレゼンスの低さを仕方なく受け入れているとも読み取れる。以上から、このクラスターは＜かつての動機＞と解釈できよう。

クラスター 4

クラスター4は競技者をイメージした際の印象と性別に関する内容でまとまっている。このクラスターは「綺麗なレオタード」、「手先が女性的」という2つの項目によって構成されているが、「美しさとか、女性的な部分があるとか、あんまりいいイメージで（世間から）見られていない部分」、「自分で見ていて女性的って思う部分もありますけど」、「芸術性を求められている競技なのでそれがいい部分でもある」、「色々言われても仕方ない」との語りから、競技に芸術性が求められること自体は肯定的に解釈しているものの、それゆえに競技を「女性的」とする他者のまなざしには、一定程度の理解は示しつつ抵抗も感じている。以上から、このクラスターは＜芸術性と世間の目＞と解釈できよう。

全体として

全体の構造を見ると、被験者にとって男子新体操は＜男子新体操の代表的な特徴・魅力・難点＞＜心理的な成長・学びの場・他者との関係＞＜かつての動機＞＜芸術性と世間の目＞というもので構成されていた。クラスター構造からも被験者の語りからも、重要な特徴が浮かび上がる。1つ目は、被験者が男子新体操を副次的・無意識的に人間的な成長のための学習の場としていた点である。「僕の中ではやっぱり（クラスター2の）男子新体操に対する姿勢、メンタル的なことが大事」

との語りからは、被験者が男子新体操から得られた最も大きな成果を人間的な成長と感じていることを示しており、「ある意味では（男子新体操の）面白さでもあると思います。普通は「面白さ」というと、新しい技ができるようになったり、そういうことを指すと思うんですけど、（クラスター2は）やらないとわからない面白さですね」との語りから、楽しさや面白さは技の習得や勝敗、競技成績などだけではなく他者との関係や自己の人間的成長を実感することによってももたらされることを学び、男子新体操の魅力としてとらえているのである。2つ目は、被験者が男子新体操を認識している視点が、自己の視点のみならず、外部の他者（男子新体操を知らない人）、観客や審判、男子新体操をしている（していた）他者、の視点を意識しながら認識されているという点である。「周りから見てわかることと僕が競技としてやっててわかる良さ」と、「今メディアとかに注目されだしたのは」、「ダンスや他の競技にない」、「他のスポーツなどにあまりない」、「上手く利用できる選手は」、「色々言われても仕方ない」という語りからもこのことが伺える。つまり、被験者にとっての男子新体操のイメージは被験者自身の認識と同時に複数の他者の認識を常に参照しながら形成されているのである。

以上の考察をまとめたものを図2に示す。

5. 結論

本稿は個人の次元で、新体操がどのようなものとして認識されているのかを分析するものであった。被験者に対するPAC分析を通して以下のことが明らかになった。男子新体操のイメージは＜男子新体操の中心的要素＞と＜男子新体操を取り巻く周辺的環境＞という2つの大きなイメージにより構成されていた。＜男子新体操の中心的要素＞は＜男子新体操の代表的な特徴・魅力・難点＞と＜心理的な成長・学びの場・他者との関係＞の2つのイメージから構成されていた。＜男子新体操の代表的な特徴・魅力・難点＞は＜スペクタクル＞と＜採点＞と＜表現＞の3つのイメージから構成されており、＜心理的な成長・学びの場・他者との関係＞は＜モチベーション＞と＜取り組みの姿勢＞の2つのイメージから構成されていた。＜男子新体操を取り巻く周辺的環境＞は＜かつての動機＞と

図2 被験者の男子新体操イメージの構造

＜外観的印象＞の2つのイメージから構成されていた。以上より、個人の次元での男子新体操のイメージ構造が明らかになった。さらに、個人のイメージの全体構造がどのようにして構成されていたかに目を向ければ、2つのことが浮かび上がった。1つは被験者が男子新体操を副次的・無意識的に人間的な成長のための学習の場となっていた点である。2つ目は男子新体操のイメージは自身の認識と複数の他者の認識を常に参照しながら形成されている点である。

本研究の限界として、筆者と被験者の関係について言及しておきたい。方法の節で述べたように、筆者は被験者に対して約2年半男子新体操の指導を行っていた。インタビュー中は被験者が自由に回答できるように心掛けたが、指導者であった筆者に対して、被験者が回答し易さと回答し難さの両方を感じていたと推測することもできる。長期に渡って関係を維持してきたという意味では回答し易い部分もあったかもしれない。しかし、元指導者に対して悪く見られたくないという気持ちが働いていたとすれば、回答し難い部分がなかったとは言い切れないだろう。そのような点でバイアスが働いていた可能性は否定できない。

一方、本稿の学術的意義は2点ある。1点目は競技のイメージを個人の次元で明

らかにしたという点である。2点目はこれまであまり例のなかった、PAC分析をスポーツ科学領域の研究法として採用した一例となる点である。

本稿の実践的な意義は、男子新体操の発展に多少なりとも貢献できる点である。本稿で明らかになった男子新体操のイメージは技術的な側面や印象論のみでなく、男子新体操を経験することの効果や個人にとっての機能をも明らかにするものであった。この知見は男子新体操の対外的アピールなどの戦略を立てる上で有益な参考資料となるだろう。

なお、本稿で明らかになった個人の認識の構造化は、被験者個人に限定されるものというよりも、一定程度以上の競技歴を持つ男子新体操経験者に共有される可能性がある。そこで今後は、競技歴の異なる男子新体操経験者を対象とし、同様の分析を行うことを課題とする。

文献

- 青木みのり, 2007, 「心理療法における問題の見方の変化に関する検討：PAC分析を用いた質的研究」『ブリーフサイコセラピー研究』16 (2), 95-108.
- 井上則子, 2010, 「PAC（個人別態度構造）分析にみる体育授業における「個」の学びの構造」『大学体育学』7, 3-12.
- 浦谷郁子, 2014, 「新体操と芸術の関係における一考察——目的のスポーツと美的スポーツの区別の過ちについて」『日本体育大学スポーツ科学研究』3, 1-9.
- 太田裕子・佐渡島紗織, 2012, 「「自立した書き手」を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識——早稲田大学における実践事例 PAC 分析」『Waseda Global Forum』9, 237-277.
- 今野博信・池島徳大, 2010, 「PAC 分析による小学校教職員の学校イメージ比較」『奈良教育大学紀要』59 (1), 217-224.
- 内藤哲雄, 2000, 「留学生の孤独感の PAC 分析」『人文科学論集・人間情報学科編』34, 15-25.
- 内藤哲雄, 2002, 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] ——「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 野田光太郎・秦美香子, 2015, 「男子新体操研究の概観と人文社会科学領域における研究の展望」『花園大学文学部研究紀要』47, 95-113.
- 平山修平, 2006, 「納得にいたるプロセスでの社会的アイデンティティとシェイムの役

割——仕事に対する価値観の違いがある場合の日本人男性の事例研究」『多文化関係学』 3,75-90.

渡部愛都子, 2009, 『新体操はスポーツか芸術か』 幻冬舎ルネッサンス

